

教員紹介冊子

(2026年4月作成)

法政大学大学院 国際文化研究科

氏名	栗飯原 文子 教授
こんな研究をしています	英語・仏語で書かれたアフリカ文学、特に小説を中心に研究しています。
こんな成果を挙げています	<p>【論文】</p> <p>「ヒューマニティの再構築に向けて——アフリカ文学と多元的共生の想像力」『思想』岩波書店, 2026年2月号.</p> <p>「アフリカ文学が紡ぐ「いま」第3回 アフリカをクィア化する／クィア化するアフリカ——クィアアフリカ文学の波」『思想』岩波書店, 2019年12月号.</p> <p>「アフリカ文学が紡ぐ「いま」第2回 メイド・イン・アフリカの可能性——アフリカの出版の未来」『思想』岩波書店, 2019年6月号.</p> <p>「アフリカ文学が紡ぐ「いま」第1回 アフリカ文学とはなにか——五〇年後の始まり」『思想』岩波書店, 2018年10月号.</p> <p>【翻訳】</p> <p>ナディーファ・モハメッド『運命の男たち』早川書房, 2025年.</p> <p>アブドゥルラザク・グルナ『楽園』白水社, 2023年.</p> <p>マアザ・メンギステ『影の王』早川書房, 2023年.</p> <p>チヌア・アチェベ『崩れゆく絆』光文社古典新訳文庫, 2013年.</p>
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	<ul style="list-style-type: none"> ・アフリカのポピュラー・カルチャー ・アフリカ映画・音楽 ・アフリカ哲学 ・パンアフリカニズムの歴史・思想 ・旧植民地世界の文学 ・ジェンダー・クィア理論
こんな授業を行なっています	多言語相関論 IA(春)/IB(秋)：アフリカ文学概論 I/II 現代アフリカ文学のさまざまな作品に触れ、歴史的・社会的文脈をふまえつつ、主題、手法、表現を学びます。いくつかのトピックに分けて作家と作品へのアプローチをおこない、アフリカ文学の主要なテーマを学び、その全体像と魅力をとらえることを目的としています。なお、アフリカやアフリカ文学に関する知識はまったく必要ありません。
学会や社会でこんな活動をしています	<ul style="list-style-type: none"> ・アフリカ（系）の作家による、古典から最新の作品まで、重要なもの、おもしろいものを日本語で紹介できるように頑張りたいと思っています。 ・芸術選奨文学部門の推薦委員（2024年度）、選考審査委員（2025年度）を務めました。
私が思う多文化的かつ、インターカルチュラルな人物	アフリカ大陸（出身）の作家のほとんど全員が“インターカルチュラル”だと思います。彼ら彼女らは、二つ以上の言語と文化をまたぎ、大陸内を移動、内外を往来して活躍しているからです。作品にもそれが色濃く反映されています。

氏名	浅川 希洋志 (あさかわ きよし) 教授
こんな研究をしています	<ol style="list-style-type: none"> 最適経験 (optimal experience) といわれるフロー経験 (flow experience) と精神的健康・psychological well-being の関係について。 異なる文化で育った人々はフローを同じように経験するのだろうか。 生理学的指標でフロー経験をどう測定するか、できるのか。 ニーチェの Amor fati (運命愛)、文化的自己観、フロー経験の関係性について。
こんな成果を挙げています	<ol style="list-style-type: none"> “Universal and cultural dimensions of optimal experiences.” (共著 : with M. Csikszentmihalyi) (<i>Japanese Psychological Research</i>, 58, 2016). (監訳) チクセントミハイ著『クリエイティヴィティーフロー体験と創造性の心理学』世界思想社 (2016年) . 「心理学者ミハイ・チクセントミハイが残したもの」『心と社会』第53巻第2号, 日本精神衛生会 (2022年) . “Dispositional flow and related psychological measures associated with heart rate diurnal rhythm.” (共著) (<i>Advanced Biomedical Engineering</i>, 12, 2023). かごしま移住ネット：ワーケーション実証研究 (鹿児島県からの依頼：共同研究) (2023). “A Preliminary Study on Immersion Levels in Various Work Processes for Collaboration between Remote Operators and Semi-Autonomous Robots.” (共同研究) (<i>Proceedings of the Joint Symposium of AROB-ISBC 2025</i>) . 「起業家体験プログラムにおける起業意思と諸要因の関係—Startup Weekend 参加者の三時点調査と共分散構造分析—」 (共著) (<i>AAOS Transactions</i>, Vol. 14, No. 2, 2026) .
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	<p>文化と心の働きに関する研究：異なる文化で育った人々は、同じ場面で同じような心の働き方をするだろうか。学校教育は文化の担い手として子どもたちに何を期待し、教育プロセスの中で、子どもたちはどのような心の働きを身につけていくのか。近年は、フロー理論を含め、このような課題を「人間の限られた情報処理能力」という視点から捉えることを考えている。</p>
こんな授業を行っています	<p>「異文化社会論 IIA/B」：文化心理学の立場から心の働きと文化の関連について学ぶとともに、異文化社会／多文化社会における適応とはどういうことかを考えていきます。また、受講者が自分自身の異文化体験に対する考察を深めていくための一助となるような授業になればと考えています。</p>
学会や社会でこんな活動をしています	<p>所属学会：日本心理学会、American Psychological Association、International Positive Psychology Association、European Network of Positive Psychology。</p> <p>小・中学校の教育研究のサポート、企業内メンタルヘルス・モニタリング・システムの構築、フロー理論を用いた起業家教育プログラムの検証、「ワーケーション」の効果と可能性の検証、フロー経験と生体指標との関係性の解明、国立障害者リハビリテーション研究所との共同研究：人間のウェルビーイングとはどういうことか（障害者支援システムを使用する人々の主観的経験を通して）など、様々な活動や研究に携わっています。</p>
私が思う多文化的かつ、インターカルチュラルな人物	<p>中村 哲 (なかむら・てつ) 氏：1946年福岡県生まれの医師。国内の病院勤務を経て、1984年パキスタン北西辺境州、現在のカイバル・パクトウンクワ州の州都ペシャワールのミッション病院ハンセン病棟に赴任し治療を始め、そのかわり難民キャンプでアフガン難民の一般診療に携わる。1989年よりアフガニスタン国内へ活動を拡げ、山岳地帯医療過疎地でハンセン病や結核など貧困層に多い疾患の診療を開始、2000年から干ばつが厳しくなったアフガニスタンで飲料水・灌漑用井戸事業を始め、2003年から農村復興のため大がかりな水利事業に携わる。2019年12月4日、アフガニスタン・ジャララバードで武装集団に銃撃され、命を落とす。中村氏は国や文化を越え、医師として、人として、様々な問題を抱えるアフガニスタンで懸命に生きる人々に寄り添い、生きた人物です。「困った人がいたら手を差し伸べる…それは普通のことです」という彼の言葉に、国際社会人の本質があるように思います。</p>

氏名	石森 大知 (いしもり だいち) 教授
こんな研究をしています	文化人類学、オセアニア地域研究。これまで南太平洋のソロモン諸島で長期間のフィールドワークを行ってきました。主な研究テーマは宗教運動、キリスト教信仰、社会・文化変容、地域開発、民族・宗教紛争などに関することです。また、宗教と公共性の問題や、太平洋における非キリスト教（イスラーム、パハーイー教など）への改宗の動きについても興味をもっています。
こんな成果を挙げています	<p>【著書】</p> <p>吉岡政徳・石森大知(編) 2025『南太平洋を知るための 60 章——メラネシア ポリネシア【第2版】』明石書店。</p> <p>石森大知・黒崎岳大(編) 2023『シリーズ地域研究のすすめ4 ようこそオセアニア世界へ』昭和堂。</p> <p>石森大知・丹羽典生(編) 2019『宗教と開発の人類学——グローバル化するポスト世俗主義と開発言説』春風社。</p> <p>【雑誌論文】</p> <p>石森大知 2023「キリスト教の人類学」とモスコ・ロビンス論争の批判的検討——メラネシア研究の視点から読み解く『異文化』24:31-47。</p> <p>石森大知 2019「民族性から土着性へ——ソロモン諸島紛争におけるイサタンブ解放運動の一側面」『国際文化学研究所』53:1-27。</p>
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	最近、関心をもっているテーマは「キリスト教の人類学」です。なかでも、植民地時代にもたらされたキリスト教的な組織や制度などの外面的な装置・配置が、今を生きるソロモン諸島の人々の生活様式や行動規範にどのような影響を与えているのか調査・研究を進めたいと考えています。
こんな授業を行なっています	私は太平洋の島々の研究をしています。授業において「太平洋限定」というわけではもちろんありません。異文化、あるいは自己と他者の文化的な差異などに興味をもち、文化人類学のもの見方やフィールドワークに基づく質的調査に関心がある院生を広く指導したいと思っています。授業では基礎知識を補強するとともに、発展、応用可能となるように問題を問ひかけます。そして個々の関心を深め、多角的な視野から研究テーマを発展させ、共感性を高められるよう指導します。
学会や社会でこんな活動をしています	<p>【受賞歴】第7回国際宗教研究所賞（2012年、国際宗教研究所）、第11回日本オセアニア学会賞（2012年、日本オセアニア学会）を受賞しています。また、「学生が選ぶベストティーチャー賞」（2017年、武蔵大学）の受賞経験があります。</p> <p>【委員歴等】2014年～2016年まで、文部科学省研究振興局・学術調査官をつとめ、研究者の立場から、学術研究および科学研究費補助事業の振興のための調査、指導や助言を行いました。</p>
私が思う多文化的かつ、インターカルチュラルな人物	私の調査地であるソロモン諸島ニュージョージア島の人びとは、異なる言語集団間でさまざまな交換を行いながら共存してきました。その彼らが話し合う際、クサゲの人はクサゲ語を、ホアヴァの人はホアヴァ語を用い、互いに自らの言語を保ちながら、相手の言葉に耳を傾け理解しようとし、そこには自文化への誇りと異文化（他者）への敬意、対等性を重んじる姿勢が見て取れます。こうした、いわゆる「名もなき人びと」による対主主義的実践は、注目に値するでしょう。

氏名	今泉裕美子（教授）
こんな研究をしています	<ul style="list-style-type: none"> ・国際関係学（International Studies）の方法論…日本のオリジナルな国際関係研究の歴史（文化や社会も対象）を、第二次世界大戦前の植民政策研究から発展した研究について。 ・ミクロネシアと日本との関係史、ミクロネシアの地域社会を、アジア及び太平洋島嶼をめぐる国際関係の中で追究。①戦前日本の南洋群島統治政策とそこに暮らす人々との関係（移民、戦時動員、引揚げと、引揚げ後の地域社会史との関係）、②太平洋戦争（南洋群島での総力戦の実態や赤道以南のミクロネシアとの関係）と米軍占領（民間収容所や労役などを通じたアメリカの“民主化”・“文化”との出会い）、③委任統治と戦略的信託統治（委任統治の掲げる「文明化」、信託統治の掲げる「自治」「独立」「平和」「安全」）をミクロネシアから検証、④ミクロネシアの戦災からの「復興」、軍事基地化と脱植民地化との関係、⑤南洋群島帰還者の諸活動・戦後ミクロネシアとの「交流」（沖縄、東京、北海道など日本各地）、⑥旧南洋群島を生きた人びとの植民地・戦争経験の解明、その継承の意義と方法を、ミクロネシアの研究者、教員と共同で取り組む（代表）。
こんな成果を挙げています	<ul style="list-style-type: none"> ・「太平洋分割のなかの日本の南洋群島統治－委任統治と「島民」の創出」中野聡他責任編集、棚橋訓編集協力『岩波講座世界歴史 19 太平洋海域世界～20 世紀』岩波書店、2023 年。 ・「第六部第六章世界の中の沖縄第二節引揚げたウチナーンチュ」（助）沖縄県教育庁文化財課史料編集班編『沖縄県史（各論編第7巻現代）』沖縄県教育委員会、2022 年。 ・今泉裕美子他編『日本帝国崩壊期「引揚げ」の比較研究－国際関係と地域の視点から』日本経済評論社、2016 年。 ・「太平洋の「地域」形成と日本－日本の南洋群島統治から考える」李成市他編『岩波講座日本歴史第20巻（地域論）』岩波書店、2014 年。 ・「南洋群島研究」鴨下重彦他編『矢内原忠雄』東京大学出版会、2011 年。
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	沖縄県史、同県内市史の編纂、執筆を通じて、地域社会・市民にとっての「歴史」、「国際関係」とは何か。歌謡、音楽、演劇、絵画、写真、映画、モノ、その他表現にみる「南洋群島」、「ミクロネシア」。
こんな授業を行っています	「異文化社会論 I A」「異文化社会論 I B」のシラバスをご参照ください。
学会や社会でこんな活動をしています	<ul style="list-style-type: none"> ・沖縄戦の記憶継承プロジェクト実行委員会主催「沖縄戦の記憶継承プロジェクト第4期講座第3回 講演：旧南洋群島（ミクロネシア）と沖縄－「もうひとつの沖縄戦」から考える」2026年3月21日（於琉球新報社） ・JOCA 沖縄主催「'25 レッツスタディ！ウチナーネットワーク 旧南洋群島に関する講座 講演：「南洋へ移民した沖縄の人々の経験とこれからのつながりに向けて」2026年2月7日（於沖縄県立図書館3階ホール） ・千代田区主催・地球市民講座2023「グアム・サイパンを知らう」第2回「グアム・サイパンの歴史 I」（2023年11月10日）、第3回「グアム・サイパンの歴史 II」（2023年11月17日）。 ・ギャラリートーク「赤松俊子の旅した『南洋群島』 原爆の凶丸木美術館・企画展「赤松俊子と南洋群島」（2015年3月28日）。
私が思う多文化的かつ、インターカルチュラルな人物	北原きよ子さん。1946年樺太アイヌの両親が第二次世界大戦後に引揚げた余市生まれ、元関東ウタリ会会長。幼い頃から抱いた違和感、疑問、怒り、悲しみ一つひとつを出発点に、自ら調べ、学び、問題の特徴を見極め、異なる文化、階層、アイヌ問題に無自覚・無知の人々に向き合い、アイヌが伝統的な方法とする話し合いを通じて問題に取り組む。アイヌの伝統文化の復元も行う。著書『わが心のカツラの木－滅びゆくアイヌといわれて』（岩波書店、2013年）は学部資料室にあります。

氏名	大嶋 良明 (教授, 准教授, 専任講師)
こんな研究をしています	現代のネット社会はどのようなのか、インターネットが我々をどのように変えるのか、これはテクノロジーのみの問題ではなく、広く人間の知的な営みに関わる問題であり文化の問題です。ネット社会=多文化情報空間の特性や問題点を情報学の立場から学んでいきます。特にネット社会でのより良い自己実現を目指して、メディアリテラシー教育, eLearning や ePortfolio 等の教育工学的手法の研究に関心があります。最近の研究関心はテキストマイニングなど機械学習の手法を用いてインターネット上のビッグデータを分析することです。また大学院時代の研究テーマも大事にしており音響処理とミュージコロジーの観点からコンピュータ音楽、電子楽器についても継続的に研究をしています。
こんな成果を挙げています	<p>大嶋良明, 「われわれにとって情報とは何か?」, 『異文化別冊: 国際文化情報学とは—その可能性と課題』, 2010, 通巻第 1 号, pp.18-31.</p> <p>大嶋良明, 「夏期 SA における文化情報フィールドワークについて」, 『異文化別冊: 国際文化情報学とは—その可能性と課題』, 2010, 通巻第 1 号, pp.201-210.</p> <p>大嶋良明, 「学部の情報教育について—これまでの歩み—」, 2010, 『異文化. 論文編』, 第 11 号, pp.73-85.</p> <p>大嶋良明, 「学部初年次教育における授業改善の試み—ICT と ePortfolio を中心として」, 『法政大学教育研究』, 2014, 第 6 号, pp.65-82.</p> <p>大嶋良明, 「学部科目への ePortfolio の活用について: 立ち上げの実施報告」, 2014, 『異文化 論文編』, 第 15 号, pp.137-153.</p> <p>以下は学会発表</p> <p>大嶋良明, 佐々木健太, 田中勇太, 「Mahara を活用した学部教育の取組み—法政大学国際文化学部の事例報告—」, Mahara Open Forum 2013.</p> <p>佐々木健太, 大嶋良明 「紙資料の効率的仕分け機能を実装した Moodle と Mahara の連携」, 2013, Mahara Open Forum 2013.</p> <p>大嶋良明, 田中勇太, 「学部教育における e ポートフォリオ Mahara 活用の継続的取組み」, 2014, Mahara Open Forum 2014.</p> <p>大嶋良明, 「Hammond B3 の発音原理のモデル化の試み」, 2018, ADADA Japan 2018.</p>
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	<ul style="list-style-type: none"> ● 情報学 (インターネット, 情報メディア論) ● 教育工学 (特に ePortfolio, eLearning) ● 電気・計算機工学 (信号とシステム, 通信, データサイエンス, 確率過程, 機械学習) ● 音声言語情報処理 (音声認識, 音響モデル, 言語モデル, 対話システム, ロバストネス) ● デジタル信号処理 (特にコンピュータ音楽, 音響, マルチメディア, 拡張現実) ● 応用言語学 (異文化コミュニケーション) ● メディアアート実践と感性工学 (インタラクティブアート, ジェネラティブアート制作, 身体性)
こんな授業を行なっています	<p>現代社会をメディアとしての諸特性において分析することを目指しています。</p> <p>【多文化情報メディア論 I A—ソーシャルメディアの調査と分析】 Twitter, ブログ, Web などインターネットの書き込みをデータサイエンスで分析します。同時にイメージ, 映像などのメディア情報の分析手法やモデル化を学び, 実際のデータに適用して分析します。</p> <p>【多文化情報メディア論 I B—行動データから知る人間社会と心理】 現代のネット社会をメディアとしての諸特性においてとらえ, 文化情報学的なアプローチで分析するなかから, 異文化理解に資する視点の開拓を試み, インターネット上のユーザの行動の分析から人間社会と心理について何が解明できるのかを学びます。</p>

<p>学会や社会でこんな活動をしています</p>	<p>法政大学市ヶ谷情報センター長 (2006-2007, 2025-現在) 法政大学グローバル人材育成推進事業 ePortfolio プロジェクトリーダー (2013.9-2015.3) 法政大学 FD 推進センター調査プロジェクトリーダー(2012-2014) 法政大学教育開発支援機構 ICT 教育プロジェクト委員(2011-2012,2013-)</p> <p>以前の研究内容です Y. Ohshima, "Environmental Robustness in Speech Recognition Using Physiologically-Motivated Signal Processing", Ph.D thesis, Carnegie-Mellon University (1993).</p>
<p>私が思う多文化的かつ、インターカルチュラルな人物</p>	<p>われわれ自身が問い続ける課題かと受け止めています。</p>

氏名	大中 一彌 (教授)
こんな研究をしています	<p>【学問分野】政治学、政治思想 【地域】フランス語圏</p> <p>【キーワード】ヨーロッパ、文化史、社会科学、認識論</p> <p>【関心】言語や文化のはざまにいる人たちが、そこから生み出されるものに関心があります。</p>
こんな成果を挙げています	<ul style="list-style-type: none"> ・「マルクス主義と国民のナラティブ」『マルクス主義キーパーソン』大月書店、2026年刊行予定。 ・「マージナル・マン論再考」『異文化』23号、2022年。 ・「黄色いベスト運動 — あるいは21世紀における多数派の民衆と政治」『対抗言論』法政大学出版局、2019年、254-289頁。 ・杉田孝夫・中村孝文編『市民社会』第八章 現代フランスの「スカーフ問題」における市民社会と国家 199-222頁 おうふう 2016年。 ・「移民社会の論じ方 — ジェラルド・ノワリエルにおける記憶と歴史 —」『思想』岩波書店 1096, 171-187頁 2015年。
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	<ul style="list-style-type: none"> ・フランスにおける社会統合（人びとをどうまとめあげていくか） 例1：ヴェルサイユ宮殿に代表される古典主義文化がもつ政治とのかかわり 例2：20世紀以降におけるイスラームと非宗教性（ライシテ）の紛争 例3：現代フランスにおけるさまざまな社会運動（Ch. ギリュイのいう「周縁部のフランス」のそれを含めた）とポピュリズムの関連 ・特定の人や作品、運動やコミュニティに対象を絞った研究を歓迎します。
こんな授業を行なっています	<p>国際文化研究科「多言語社会論A」と「多言語社会論B」を担当しています</p> <p>授業のテーマを紹介する動画</p> <p>多言語社会論A https://x.gd/nsS4Y</p> <p>多言語社会論B https://x.gd/ZTqye</p> <p>問い合わせや各種相談は、次の Microsoft フォームからお願いします</p> <p>https://forms.office.com/r/dnXXNFXw6x</p>
学会や社会でこんな活動をしています	<ul style="list-style-type: none"> ・法政大学出版局の理事長を現在つとめ、学術出版の困難さと意義を感じています。 ・2015年にパリ日本文化会館の招聘で客員教授を務めました。コロナ禍や現在の中東における戦禍から省みて、得難い体験だったとあらためて感じています。
私が思う多文化的かつ、インターカルチュラルな人物	<p>リービ英雄先生と鈴木晶先生。リービ先生は、日本語で小説を書く作家として知られているが、フランス語についても豊かな学識をお持ちで、立ち話でされた質問に私では答えられないようなことがあった。鈴木晶先生からは、サバティカル明けに、フランスの国立図書館のトイレはなぜ便座がないのかという質問をされた。いまだ確定的な答えを見いだせていない。</p>

氏名	大野 ロベルト 教授
こんな研究をしています	<p>古典を中心とする文学の研究をとおして、日本の言葉や文化がどのような仕組みを持ち、どのように発展してきたのかを考えています。また、近現代における古典文学の受容や、翻訳による海外への越境などについても研究しています。</p>
こんな成果を挙げています	<ul style="list-style-type: none"> ・『「もののあはれ」の訳し方』文学通信、2025年。 ・“(En)gendering Literature: Tosa Nikki, or Where Writing Begins,” in <i>Gender Fluidity in Japanese Arts and Culture</i>, McFarland, 2025, pp. 17-31. ・“Illness in the Echo Chamber: The Rise of Leprosy Literature in Japan,” in <i>Voiced and Voiceless in Asia</i>, Palacký University Olomouc, 2023, pp. 353-378. ・『土佐日記』英訳ことはじめ『日本研究』62集、2021年、69-91頁。 ・『紀貫之 文学と文化の底流を求めて』東京堂出版、2019年。
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	<p>文学理論を援用してテキストを分析することを続けて来たため、様々な表現や文化の事象を幅広く、理論的に検討することに関心があります。</p> <p>文学に関しては古典だけでなく、明治期から昭和期までの近代文学はもちろん、フランス文学やドイツ文学にも親しんで来ましたので、世界における日本文学の位置というものにも関心があります。</p> <p>また、文学と権力(例えばハンセン病文学など)、言葉と身体(例えば能や舞踏など)といったテーマについても興味を持ち、研究しています。</p>
こんな授業を行なっています	<p>「多言語相関論 IIA・B」</p> <p>パロディという汎用性の高い概念を介して日本文化の特徴を抽出したうえで、それを異なる時代や文化の場合と比較検討するというプロセスをとおして、論理的に思考する技術を身につけます。</p> <p>パロディは言うまでもなく笑いと結びついており、研究という堅いものとは対照的なイメージがありますが、おそらく笑いは人間にゆるされた最も高度な行為の一つです。笑いについて考えることは、人間について考えることなのです。</p>
学会や社会でこんな活動をしています	<p>求めに応じて、市民講座の講師を務めたり、展示や番組づくりに協力したりしています。紀貫之をとりあげたNHK「知恵泉」では、講師役として出演もしました。</p> <p>また、文学研究の実践として、大野露井という筆名で創作や海外の文芸作品の翻訳を行っています。小説に『塔のない街』(河出書房新社、2024)、翻訳にコルヴオー男爵『教皇ハドリアヌス七世』(国書刊行会、2023)などがあります。</p>
私が思う多文化的かつ、インターカルチュラルな人物	<p>専門の観点からも、ぜひ紀貫之を挙げたいと思います。大陸の文学である漢詩を消化しながら、日本独自の表現の地平を切り拓いた貫之のような歌人たちの活躍がなければ、現代の私たちの言葉や世界観はまるで違うものになっていたはずで。結局のところ、文化を守り育てることができるのは、異文化に心を開くことのできる人々なのではないでしょうか。</p>

氏名	小川 敦 (教授)
こんな研究をしています	社会言語学、特に多言語社会であるルクセンブルクについて長年研究しています。ルクセンブルクはドイツ語の一変種を独自の言語「ルクセンブルク語」として作り上げつつ、フランス語とドイツ語を併用する社会であり、また人口の約半数が外国籍という複雑な社会です。多言語教育政策とそれにともなう社会的格差や課題について研究しています。
こんな成果を挙げています	<ul style="list-style-type: none"> ・小川敦 (2025) 「ルクセンブルクを代表する言語とは何か ー移民による社会の多言語化と国語としてのルクセンブルク語の位置づけー」、『ことばと社会』、三元社 21～44 頁。 ・小川敦 (2025) 「ルクセンブルクの初等教育におけるフランス語識字教育の導入について (研究ノート)」、阪神ドイツ文学会『ドイツ文学論攷』66 号、53～64 頁。 ・小川敦 (2022) 「ルクセンブルク語振興戦略」とその成立背景に関する一考察」、ドイツ文法理論研究会『エネルギー』47 号、29～50 頁。 ・小川敦 (2021) 「多言語社会ルクセンブルクにおける言語イデオロギーの「対抗」」、柿原武史・仲潔・布尾勝一郎・山下仁 (編著)『対抗する言語 日常生活に潜む言語の危うさを暴く』、三元社、37～66 頁。 ・大澤麻里子・小川敦・境一三 (2020) 「イタリア・南チロルにおける CLIL ードイツ語系学校への導入を巡ってー」、日本言語政策学会『言語政策』16 号、29～52 頁
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	私個人としてはルクセンブルクの研究を長年行ってきましたが、共同研究ではイタリア・南チロルや、フランス・アルザス、スイス・バーゼル市の言語 (教育) 政策なども扱ってきました。ドイツ語圏やヨーロッパの研究が多いですが、それに限定せず、移民などの言語的なマイノリティの権利や言語教育など、社会と言語の関係や言語政策に広く関心を持っています。
こんな授業を行なっています	多文化相関論ⅡA・B 授業では言語と教育、格差、権利、言語政策について、主に多言語社会や移民社会の視点から考えます。そのために文献を読み、議論していきます。複数の言語変種が用いられる社会、また外国語として言語を学ぶ社会、言語的なマイノリティの住む社会等を広く多言語社会として捉えて考察します。日本の国内外の事例を視野に入れていきます。
学会や社会でこんな活動をしています	日本独文学会において語学ゼミナールの実行委員、機関誌編集委員を、阪神ドイツ文学会においても機関誌編集委員をつとめています。以前はドイツ文法理論研究会にて編集委員、阪神ドイツ文学会で研究発表会やシンポジウムを企画する企画幹事、日本言語政策学会では年に 1 度行われる研究発表大会の企画を担う大会委員会に加わっていました。
私が思う多文化的かつ、インターカルチュラルな人物	他者、そして自己の言語や文化的な多様性を客観的に理解し、尊重し、言語化していく力を持つ人。そのための努力を常に惜しまない人。大学院生のみなさんにそうであってほしいと願いますし、私もそうありたいと思います。

氏名	Letizia GUARINI (准教授)
こんな研究をしています	日本現代文学における家族、とりわけ父親像や父娘関係を研究しています。また、文学における妊娠・出産・育児、女同士の友愛関係、フェミニズム運動と文学の関係など、さまざまなテーマに焦点を当てながらジェンダーの視点から文学を研究しています。国や言語の境界を越えるトランスリンガル・トランスカルチュラルな文学についても研究しています。
こんな成果を挙げています	「異国の共同体で居場所を見つける—須賀敦子の越境性をめぐって—」『昭和文学研究』90号、2025年3月、82-97頁 “Trans Bodies and Gender Fluid Fatherhood in Contemporary Japanese Literature.” <i>Gender Fluidity in Japanese Arts and Culture. Critical Essays</i> , edited by Dean Conrad and Sayuki Hirano. McFarland, 2025. “‘Breast-Is-Best’ and Care in Fukazawa Ushio’s <i>Chibusa no kuni de</i> .” <i>Japanese Language and Literature</i> 58(2) (2024): 253–283. https://doi.org/10.5195/jll.2024.323 “Dismantling the Family Ideology in Contemporary Japanese Literature: Hatred and Disgust in Three Family Stories by Kakuta Mitsuyo.” In <i>The Asian Family in Literature and Film: Changing Perceptions in a New Age-East Asia, Volume I</i> , edited by Bernard Wilson, Sharifah Aishah Osman. Palgrave Macmillan, 2024. 『アンソシヤル ディスタンス』—コロナ文学が語る脆弱性とケアの倫理— 泉谷瞬編『現代女性作家読本 22 金原ひとみ』鼎書房、2024年
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	文学はもちろん、映画、漫画、アニメ、ドラマ、CMなど、幅広くメディアにおけるジェンダー・セクシュアリティの表象を分析することに関心があります。また、日本、そして世界各国における家族の形の多様化や性役割に関する社会的規範への違和感を語る声にも興味を持って研究しています。
こんな授業を行なっています	「多文化相関論IA・B」 ジェンダー研究理論を学びながら、人種、ジェンダー、性的指向・性自認などについて考察し、現代社会と文化について考える授業を行います。また、ポップカルチャーとクィアネスの関係性について考察しながら、クィア理論の観点から表象文化を分析する力を養います。
学会や社会でこんな活動をしています	ジェンダー・セクシュアリティ研究についてのイベントを企画・運営しています。今までジェンダーと写真に関するイベント、翻訳に関するイベント、また映画上映会などを開催してきました。 また、イタリア語で日本の文芸作品を紹介して、翻訳しています (Seo Maiko, <i>Cinque benedizioni per un matrimonio</i> , Edizioni E/O, 2026; Miura Shion, <i>Il pesce e la luna</i> , Asiasphere, 2025;その他)。
私が思う多文化的かつ、インターカルチュラルな人物	フェミニズム、クィア理論、ポストコロニアル理論を交差させ、制度的差別や感情などを研究するフェミニスト学者のサラ・アーメド (Sara Ahmed)。 国際文化研究科の修了生でもある、「台湾生まれ、日本語育ち」の作家、温又柔。

氏名	輿石 哲哉（教授）
こんな研究をしています	<p>・英語形態論（英語の語を中心とした領域。形態論が絡む音韻現象、形態現象、言語史なども含む）。英語音声学・音韻論。英語辞書学（英語辞書の歴史、比較等）。日本語との対照研究（書記体系、語彙構造等）。</p> <p>私の場合、一つの事象を理論的に突き詰め深化させていくタイプの研究ではなく、さまざまな事象を記述し、一見無関係に思われることを関係づけ、新たな光を当てていくタイプの研究になることが多いです。</p>
こんな成果を挙げています	<p>・『コンパスローズ英和辞典』（赤須 薫監修・編集）文法解説を執筆。2018年、研究社より出版。</p> <p>・『歴史言語学』（服部 義弘・児馬 修編集）第6章「形態変化・語彙の変遷」2018年朝倉書店より出版。</p> <p>・‘Two Types of Adjectives and the History of English Word Formation.’（単著、論文）2012年『歴史言語学』(<i>Historical Linguistics in Japan</i>) 第1号 23-38頁掲載。</p> <p>・<i>Collateral Adjectives and Related Issues</i>.（単著、書籍）2011年、Peter Lang (Bern, Switzerland) より出版。</p> <p>・『ライトハウス英和辞典』、『カレッジライトハウス英和辞典』、『ルミナス英和辞典』の項目執筆および編集。東京：研究社より。</p> <p>最近では、3年連続で『異文化』に「学生用教材」を執筆。</p>
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	<p>・英語が関係する事象一般。言語間の比較・対照研究全般。英語での作文指導。インターネットを利用した英語の新しい学習法。時事英語。英語圏・欧州の言語と歴史。</p>
こんな授業を行っています	<p>学部授業では、ヴィジュアルを用いたプレゼン形式を採用しています。さらにHoppiiによる事前・事後の情報提供等を行い、学生が理解を深められるよう心がけています。大学院の授業では、学生の知識・興味等がさまざまなため、学生との話し合いをベースに授業の形式・進め方等を決めていきます。英語学、言語学の知識のない学生でも理解できるように、十分な例を挙げながら解説し、一見とっつきにくい方法論をできるだけ早く習得できるように努めています。また、英語や文化についても理解を深められるように指導しています。</p>
学会や社会でこんな活動をしています	<p>かつて3年経過、5年経過等の中高英語教員の研修講師を務め、辞書指導等を指導しました。2012年、2015年には <i>Journal of Linguistics</i>, <i>Word Structure</i> の論文審査員を務めました。英米の大学院で10年余り研究生活を送った経験から、英語圏留学全般についてのコンサルティングや、海外の大学等との交流事業の企画・推進も行ってきました。また30回を超えて行き来をしているスコットランドの歴史・文化の紹介やその普及にも努めています。</p>
私が思う多文化的かつ、インターカルチュラルな人物	<p>橋本 萬太郎（言語学者）。1932年群馬県生まれ。私の研究分野から挙げました。もともと中国語の研究者でしたが、米国の大学院に学び、独自の言語類型地理論を提唱し、スケールの広い学者でした。『現代博言学』（大修館、1981）で、彼の幅の広い考え方の面白さに触れることができますが、時折様々な分野の学者と行った対談等にも、とても刺激的な知見が垣間見られます。1987年没。</p>

氏名	佐々木一恵 教授
こんな研究をしています	19世紀末から20世紀初頭の米国聖公会におけるアングロ・カトリシズム（イギリス国教会においてカトリック的要素の復興を唱えた神学）の興隆から、米国の革新主義運動を捉えなおす研究をしています。とりわけ、ジェンダー・セクシュアリティとアングロ・カトリシズムの興隆の関係に注目し、「生」（感情体制から生・政治に至る）の避難所としての宗教（アングロ・カトリシズム）と社会運動の連関性について検討しています。
こんな成果を挙げています	<p>（著書・単著）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● <i>Redemption and Revolution: American and Chinese New Women in the Early Twentieth Century</i> (Ithaca, NY: Cornell University Press, 2016). <p>（論文）</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 「『神に奉獻した生』とプロテスタントの女性主体：19世紀後半のアメリカにおける聖マリア修女会の実践から」『異文化』24号、2023年。 ● 「善き生の回復を求めてーラルフ・アダムズ・クラムの教会建築論に見る革新主義期アメリカに抗するアングロ・カトリシズムの想像力」『年報アメリカ研究』56号、2022年。 ● 「プロテスタンティズムの倫理と革新主義期アメリカの精神ーアングロ・カトリシズムの視点から見る生政治ー」『異文化』23号、2022年。 ● 「聖十字架修女会の会員とセツルメント運動ー生と活動の様式としてのアングロ・カトリシズム」『ジェンダー史学』16号、2020年。 ● 「『第三者』性のポリティクスー19世紀末ニューヨークの聖公会員の社会改革運動と公共領域の再編」『アメリカ史研究』42号、2019年。
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	19世紀後半から20世紀前半のアメリカ合衆国の思想史・宗教史・ジェンダー史
こんな授業を行なっています	<ul style="list-style-type: none"> ● 「多文化相関論Ⅲ（歴史学の諸アプローチ） 歴史学の諸潮流について文献講読を中心に議論を行なっています。 ● 「ジェンダー論（ジェンダー史の展開）」 歴史学の視点からジェンダー・セクシュアリティを取り上げた文献講読を中心にして議論を行なっています。
学会や社会でこんな活動をしています	<ul style="list-style-type: none"> ● Cornell University Press の査読委員 ● The Journal of Pacific History の査読委員
私が思う多文化的かつ、インターカルチュラルな人物	エドワード・サイード

氏名	佐藤千登勢 教授
こんな研究をしています	20 世紀初頭のロシア・アヴァンギャルド芸術を専門としています。とりわけ、ロシア・フォルマリズムの主導者ヴィクトル・シクロフスキイの芸術理論、小説、映画作品を中心に論文や本をまとめてきました。現在は、ロシア(ソ連)、中東欧諸国の映画を中心に作品分析を行っています。
こんな成果を挙げています	<ul style="list-style-type: none"> ・『シクロフスキイ 規範の破壊者』(南雲堂フェニックス、2006) ・『映画に学ぶロシア語:台詞のある風景』(東洋書店、2009) ・「幾何学的フォルムの可能性:ヴィクトル・シクロフスキイの場合」、貝澤哉、野中進、中村唯史 編著『再考 ロシア・フォルマリズム』(せりか書房、2012) ・「ロシア・東欧の映画人」17 項目の概説、『岩波世界人名大辞典』二分冊(岩波書店、2013) ・「文芸映画」の項目概説、『ロシア文化事典』(丸善出版株式会社、2019) ・「映画『貴族の巢』に刻まれたウサーヂバ表象」『言語と文化』第 21 号(法政大学 言語・文化センター、2024) ・翻訳:タチヤナ・コトヴィチ『ロシア・アヴァンギャルド小百科』桑野隆 監訳(水声社、2008) うち「アヴァンギャルド」「形式主義学派」「未来主義」など 51 項目 ・翻訳:ヴィクトル・シクロフスキイ『エイゼンシュテイン』(水声社、2026) [予定]
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	<ul style="list-style-type: none"> ・映画学 ・映像分析 ・文学作品分析 ・抑圧と被抑圧の諸相
こんな授業を行なっています	<div style="border: 1px solid black; padding: 2px; text-align: center; margin-bottom: 5px;">多文化芸術論 IA/IB</div> <p>ソ連・ロシア、チェコ、ポーランド、ハンガリー、エストニアの映画27作品(1920 年代～2020 年代)を対象とし、国家のイデオロギーと芸術の関係について、また芸術の審美的要素について概観し、院生のみなさんと作品の一部を鑑賞しながら意見を交換する授業を行なっています。映画テキストを審美的快楽の体験の場としてのみならず、社会批判の装置として捉え直し、その技法や表象の語る多義性について考えることが目的となります。翌週までに、議論点や自身の見解を簡潔にまとめたリアクションペーパー(500～800 字)を提出してもらいます。</p>
学会や社会でこんな活動をしています	<ul style="list-style-type: none"> ・日本ロシア文学会の理事を務めています。 ・慶應義塾大学通信教育部教科書『ロシア文学』金田一真澄 編著(2007 初版第1刷)の分担執筆。 ・『ロシア NIS 調査月報』(一般社団法人ロシア NIS 貿易会発行)にロシア映画のコラムを連載していました(2014 年 12 月号～2020 年 8 月号)。 ・放送大学東京多摩学習センターにて、「ロシアと中東欧の映画」に関する面接授業を行っています(2017 年～現在)。

氏名	重定 如彦 (しげさだ ゆきひこ) (教授)
こんな研究をしています	ユビキタスコンピューティング。 最近は人工知能にも興味を持っています。
こんな成果を挙げています	「不完全情報ゲームにおけるメタ節点・メタ行動を用いた ゲーム木構築手法, BMI 命令等を用いた高速化手法」 コンピュータソフトウェア 36 巻第 1 号 p.119-151, 2019, 日本ソフトウェア学会 「Interoperable Spatial Information Model and Design Environment Based on ucR Technology」 IEICE Transactions on Information and Systems, 2013 『実習情報リテラシ 第 4 版』サイエンス社, 2024 『情報学基礎』培風館, 2020 『学生のための JavaScript』東京電気大学出版局, 2022
ほかに、こんなジャンルに関心を持っています	コンピュータのプログラミングによるものづくりにも関心を持っています。最近では、人工知能を使ったプログラミングなどをテーマにした授業も行っています。
こんな授業を行っています	現在、大きな社会的注目を集めている人工知能について、古典的なチェスなどのゲームを題材とする AI からはじめ、近年注目を浴びている画像を認識するディープラーニングを用いた AIなどを題材とした実習を行いながらその仕組みについて学び、人工知能ができる事、できない事について理解できるようにする。また、人工知能が社会に与える影響などについて考察する。
学会や社会でこんな活動をしています	アジアの諸国を対象とした留学生の奨学金の選考委員を行っています。
私が思う多文化的かつ、インターカルチュラルな人物	

氏名	副島 健作 (教授)
こんな研究をしています	現代日本語文法、言語学、日本語教育を専門としています。特に、日本語教育において重要となる「日本語らしさ」とは何か、また世界の言語の中で日本語がどのような特徴を持つのかという点に関心を寄せています。研究では、アスペクト（開始・進行・継続・完了など）やヴォイス（能動・受動・使役など）といった文法構造に注目し、日本語・韓国語・ロシア語など複数言語を対象に、結果表現や受動構文の意味・機能の違いを比較しながら考察しています。
こんな成果を挙げています	副島健作 (2025). 音声言語における人為的結果の多様性－韓国語の受動表現と自動詞－. 異文化, 25,59-80. 副島健作 (2024). 音声言語における結果表現の使い分け－過程の知覚はどう影響するか－. 社会言語科学, 27(1),127-142. 副島健作 (2023). 受身や自動詞とその周辺構文による結果の表現－日本語, 韓国語, ロシア語, エストニア語を対象に－. 異文化, 24,107-131. Soejima, Kensaku (2014). On expressions of agent de-topicalized intentional events: A contrastive study between Japanese and Russian. <i>Journal of Japanese Linguistics (JLJ)</i> . Vol. 30. 115-136. 副島健作 (2013).「原因」を表す接置詞の文法化: 日本語とロシア語を対象に. <i>Studies in Language Sciences－Journal of the Japanese Society for Language Sciences－</i> .第 12号. 95-111. 副島健作 (2007). 日本語のアスペクト体系の研究. ひつじ書房.
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	自然な日本語とは何かを考えることは、日本語教育にとって非常に重要です。外国人学習者の日本語には、しばしば微妙な不自然さや違和感が生じます。また、意図せず発した表現が相手を不快にさせることもあります。こうした問題を避け、学習者が自然で違和感のない日本語を使えるようになるためには、「自然な日本語」の特徴を理論的に明らかにする必要があります。さらに、その知見を踏まえた日本語教育が、多文化共生社会においてどのような役割を果たし得るのかについても関心を持ち、研究を進めています。
こんな授業を行なっています	「多言語相関論IVA」 日本語を母語としない学習者に日本語を教えるという視点から、日本語の文法・語彙・コミュニケーションの特徴を学びます。学習者の母語との対照を通して日本語の特性を理解し、多文化共生社会における日本語の役割を言語学的に考察します。
学会や社会でこんな活動をしています	日露青年交流センター 日本語教師派遣事業 研修コーディネーター (2023年4月-)
私が思う多文化的かつ、インターカルチャーな人物	多文化的かつインターカルチャーな人物として、理想的な日本語教師が思い浮かびます。日本語教師は、異なる文化的背景を持つ学習者と向き合いながら、異文化理解と多様性の尊重を日々の教育実践の中で体現しています。多文化共生の視点を持ち、効果的なコミュニケーションを通じて学習者を支援する姿勢は、まさにインターカルチャーな人物像そのものです。こうした姿勢は、私自身が研究・教育において大切にしている価値観とも重なります。

氏名	高柳 俊男 (教授、准教授、専任講師)
こんな研究をしています	<p>専門は朝鮮近現代史で、日本との関係を中心に研究しています。激動の歴史のなかで、人々が海峡を越えてお互いをどう認識し、移動や摩擦・交流を繰り返してきたのか、その過程全般を守備範囲としています。</p> <p>なかでも、日本に渡ってきた人々（在日朝鮮人：総称）の経てきた歴史や、そのなかで培われた文化、そして日本人・日本社会との関係について重点的に研究しています。従来見落とされてきたものの、本来大事と思われる埋もれた事実や資料の掘り起こしにも力を注いでいます。【なお、2026年度で定年退職となります。】</p>
こんな成果を挙げています	<ul style="list-style-type: none"> ・「映画『海を渡る友情』と北朝鮮帰国事業」（『在日朝鮮人運動史研究』第29号・第30号連載、1999年・2000年） ・「渡日初期の尹学準—密航・法政大学・帰国事業」（『異文化』第5号、2004年） ・「中西伊之助—支配民族と被支配民族間の溝を乗り越える」（鈴木靖／法政大学国際文化学部編『国境を越えるヒューマニズム』、法政大学出版局、2013年） ・「留学生を主対象とする国内研修実現への歩み—法政大学国際文化学部の教育実践の記録として」（熊田泰章編『国際文化研究への道』、彩流社、2013年） ・「飯田・下伊那研修を意義あるものとするために—国際系学部の事前学習授業の実際から」（学輪 IIDA 機関誌『学輪』、第2号、2016年） ・「日本人と在日朝鮮人の『連帯』に関するささやかな模索」（『抗路』第10号、2022年12月）
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	<p>韓国・朝鮮関係なら、広く興味があります。ほかに、満州移民をはじめとする東アジアの民族問題や、多文化・多民族共生に向けた日本社会の動向全般にも関心があります。</p> <p>研究のスタイルとして、文字資料を使用するのは当然ですが、映像資料の収集・活用や、体験者からの聞き取りにも力を注いでいます。また、イメージをふくらませるため、なるべく現地を訪れ、「足で稼ぐ」ことをモットーとしています。一例として、「歩いて知る東京の中の『朝鮮』」というフィールドワークを、1990年以来毎年実施しています。</p> <p>近年は、学部の SJ (Study Japan) 国内研修の担当者として、研修地の長野県南部やその周辺地域の調査研究や、大学史委員会や自校教育に携わる者として、学徒出陣をはじめとする法政大学史の解明にも取り組んでいます。</p>
こんな授業を行なっています	<p>どんな学問をやるにしても、その学問が形成されてきた時代への考察は欠かせません。春学期は、特定の個人の伝記的著作物を媒介に、戦前ないし戦後日本における時代潮流や社会運動を、とくにアジアとのかかわりの中で追う授業を行っており、これまで鶴見俊輔・和田春樹・石田雄・富山妙子・岡部伊都子・日高六郎・松本昌次・上田正昭・茨木のり子・柳瀬正夢などを取り上げてきました。（「多民族共生論ⅡA」）</p> <p>秋学期は、在日朝鮮人を軸とした日本の多民族共生がテーマです。近年は、私自身がこれまで書いてきた文章を組上に載せています。（「多民族共生論ⅡB」）</p>
学会や社会でこんな活動をしています	<p>大学1年生のとき、NHKに朝鮮語講座開設を要望する署名運動が起こり、そこに集まった人たちで読書会を作りました。それ以来半世紀近く、私の自宅を事務局に「鐘声の会」として読書会活動を続け、ミニコミ誌『鐘声通信』を月刊で550号あまり発行しています。目標としてきた柏木義円の『上毛教界月報』全459号を8年ほど前、無事突破しました。どこまで続くか不明ですが、「継続は力なり」で頑張っています。</p> <p>近年は、SJ 国内研修の業務から発展して、研修地である長野県飯田市の委員会、SENA（三遠南信地域連携ビジョン推進会議）、そして「伊那 VALLEY 映画祭」にも関わっています。</p>
私が思う多文化的かつ、インターカルチュラルな人物	<p>中学の理科教師だった梶井陟（1927～88年）は、戦後の一時期存在した東京都立朝鮮人学校に赴任。ハンゲルで書かれた生徒の名簿が読めなかったことから朝鮮語を猛勉強して、最後は富山大学の朝鮮語・朝鮮文化コースの主任教授になりました。こうした人物も、多文化的かつインターカルチュラルな人物に思います。梶井陟については、『都立朝鮮人学校の日本人教師』（岩波現代文庫）をご参照ください。</p>

氏名	張 勝蘭 (教授、准教授、 専任講師)
こんな研究をしています	<ul style="list-style-type: none"> ・中国少数民族の歴史・社会・文化について研究しています。 ・特に少数民族社会と漢族社会との関係性に着目し、それによる少数民族の独自性・多様性の変化、及びアイデンティティの変容を考察しています。 ・主に中国南部の代表的な少数民族苗（ミャオ）族に焦点を当てて研究してきましたが、東南アジア・欧米に居住する同系統の Hmong 族にも注目しています。
こんな成果を挙げています	<p>【論文】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「明清期の貴州地方志及び「百苗図」に見える「苗」の記述について」『異文化』27号、法政大学国際文化情報学会、2026年。 ・「改裝」政令にみる苗族服飾の変遷と苗族アイデンティティ—清朝期及び民国期の貴州省を中心に」『21世紀アジア学研究』第20号、国士舘大学21世紀アジア学会、2022年。 ・「土司統治の変遷から見る高坡苗族の伝統文化—中曹長官司長官謝氏を中心に」工藤元男教授退休記念論集編集委員会編『中国古代の法・政・俗』汲古書院、2019年、431-460頁。 ・「貴州高坡苗族「敲牛祭祖」について—高坡郷一帯を中心に」『WASEDA RILAS JOURNAL』NO.6、早稲田大学総合人文科学研究センター、2018年。 <p>【翻訳】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・候沖「大理仏教—インド仏教と中国仏教の二重構造」新川登亀男編『仏教文明と世俗秩序—国家・社会・聖地の形成』、勉誠出版、2015年。
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	<ul style="list-style-type: none"> ・博物館学の観点からみる民族伝統文化と地域社会 ・東アジアにおける民族間の文化交流史 ・日本における華僑華人社会、エスニック・マイノリティ ・近現代中国の歴史、社会、文化
こんな授業を行なっています	<p>マイノリティ社会論 A（春）・B（秋）</p> <p>春学期は、日本とイギリスにおける中国系移民集団を対象に、それぞれの移住プロセス、コミュニティの形成、ホスト社会との関係、アイデンティティの変容について考察する。秋学期は、北アメリカと中国を事例に、国民国家の構築と先住民・少数民族・難民の問題について検討する。</p> <p>マイノリティの諸相を複眼的に考察し、多文化共生について深く考えていきます。</p>
学会や社会でこんな活動をしています	<ul style="list-style-type: none"> ・早稲田大学と成都考古隊（現成都考古院）の中国四川省芒城遺跡の共同調査に通訳要員として参加し、三星堆文明叢書の翻訳に携わりました。日中学術交流に微力ながら貢献できるよう、翻訳も引き続き頑張りたいと思っています。 ・成都博物院（現成都博物館）の特別研究員として、民俗資料の収集、古代文明三星堆・金沙遺跡のドキュメンタリー作成などに協力しました。学芸員の資格をいかし、今も交流を続けています。 ・2017年に「スミセイ女性研究者奨励賞」を受賞したことをきっかけに、同プロジェクトの周知に協力させていただくことになりました。今後も女子学生や女性研究者への支援活動に積極的に関わっていきたいと思います。

氏名	廣松 勲（ひろまつ いさお）准教授
こんな研究をしています	<p>①フランコフォニー文学研究（カリブ海域諸島とカナダ・ケベック州）</p> <p>②地域研究（同上）</p>
こんな成果を挙げています	<p>①評論：「静かな革命と雑誌『パルティ・プリ』」「ケベック文学におけるハイチ系移民文学の登場」「グザヴィエ・ドラン」『ケベックを知るための56章（第2版）』明石書店，2024年。</p> <p>②評論：「『たかが世界の終わり』における映像技法：ケベック映画としてのの／からの出立」『ユリイカ』特集「グザヴィエ・ドラン」，2020年4月号，青土社，2020年。</p> <p>③共訳：ピエール・ヌヴェー，「ケベックと北米大陸のフランコフォニー（ニューイングランド、アカディア、フランス語圏オンタリオ）」（廣松勲・小松祐子共訳），『ケベック研究』第10号，日本ケベック学会，2018年，93-108頁。</p> <p>④評論：「第5章 エドゥアール・グリッサン（1928-2011）：〈関係〉の詩学から全一世界へ」，『国際社会人叢書2：〈境界〉を生きる思想家たち』，榎木玲子／法政大学国際文化学部編，法政大学出版局，2016年，105-129頁。</p> <p>⑤論文：「現代ケベック文学の諸潮流：移民文学と新郷土文学を中心に」，『Nord-Est』第7・8号合併号，日本フランス語フランス文学会東北支部会，2015年，84-105頁。</p> <p>⑥編集・翻訳・エッセイ・書評：日本フランス語圏文学研究会会報『Archipels francophones : bulletin du Cercle d'études japonaises des lettres francophones』第5号の編集／巻頭エッセイおよびインタビューの翻訳／エッセイ・書評の執筆，2015年8月4日。</p> <p>⑦論文：《 Esprit d'avant-garde dans les romans de Raphael Confiant 》，dans <i>Experience de l'extreme, la culture et l'art d'entre-deux guerres</i> (Actes du colloque international d'automne 2014), CFAF, 2014, pp. 177-191.</p> <p>⑧評論：「文学研究における社会」，『総合政策学のための思想研究』第1号，慶應義塾大学総合政策学部・堀茂樹研究会，2013年，24-29頁。</p> <p>⑨論文：「パトリック・シャモワゾーにおけるトランスカルチャー：記憶の伝達から伝達の記憶へ」，『Nord-Est』第6号，日本フランス語フランス文学会東北支部，2013年，78-96頁。</p> <p>⑩博士論文：《 Melancolie postcoloniale : relecture de la memoire collective et du lieu d'appartenance identitaire chez Emile Ollivier et Patrick Chamoiseau 》，these doctorale presentee a l'Universite de Montreal, Directrice : Lise Gauvin, 2012.</p> <p>*その他：発表、書評、講演会司会・通訳・報告書作成、対談、コミュニティ誌記事など多数。</p>
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	<p>①ホラー映画，ドキュメンタリー映画（特にフェイク・ドキュメンタリー）における物語・語りの構造</p> <p>②実話系怪談小説における物語・語りの構造</p>
こんな授業を行なっています	<p>2025年度秋学期：「多言語芸術論II」</p> <p>フランス語圏文学を題材として、作品と社会との関わりを論じます。基本的に抗議科目ですが、コメントシートや授業内での対話などを通じて、受講生の研究におけるヒントを与えます。</p>
学会や社会でこんな活動をしています	<p>【受賞歴】①日本学術振興会特別研究員PD（2012年～2014年）／②エミール・オリヴィエ奨学金（2011年，モントリオール大学）／③学会奨励賞（2011年，フランス語フランス文学会）</p> <p>【所属学会・役職】①日本フランス語教育学会：初中等教育委員／②日本ケベック学会：副会長（2018年～），編集委員長（2016年～2020年）／③日本フランス語フランス文学会／④日本フランス語圏文学研究会／⑤国際フランス語圏研究会議（CIEF）</p> <p>【その他の活動など】①集中講義（2018年，東北大学）／②「第10回 フランコフォニーを発見しよう」管理運営（2018年，法政大学）／③「北米文化論（ケベック講座）」の開講・管理運営（2018年度～）／④「東日本および西日本高校生フランス語暗唱コンクール」の課題テキスト選定（2013年度～）</p>
私が思う多文化的かつ、インターカルチュラルな人物	<p>エドゥアール・グリッサン：マルティニック系作家。複数の文化圏に跨りながら、独自の世界観に基づいた詩学を作り上げた。</p> <p>ダニー・ラフェリエール：ハイチ系ケベック人作家。文化的所属という自明の事柄を問題に付し、文化横断的な「自己」の在り方を物語化し続けている。</p> <p>ファビエンヌ・カノール：マルティニック系作家。文化の境界にあることを、フェミニズムを中心とした交差性から考え、物語を書き続けている。</p>

氏名	松本 悟 教授
こんな研究をしています	<ul style="list-style-type: none"> ・開発援助の制度、効果、影響（国際組織、日本政府、NGO、新興ドナー） ・調査の機能（特に環境・社会影響評価） ・メコン河流域/流域国の地域研究、開発と環境（自然・社会環境）
こんな成果を挙げています	<p>▼主な単著</p> <p>『調査と権力』東京大学出版会、2014年。 『メコン河開発』築地書館、1997年。</p> <p>▼主な編著書（主編者）</p> <p>『国際協力と想像力—イメージと「現場」のせめぎ合い』日本評論社、2021年。 『NGOから見た世界銀行—市民社会と国際機構のはざま』ミネルヴァ書房、2013年。</p> <p>▼主な単著論文</p> <p>「ミャンマーの「民主化」を捉え直す—日本ではほとんど認定されなかったミャンマー難民を手がかりに」『難民研究ジャーナル』14号、2025年、34-50頁</p> <p>「開発協力大綱と軍関係へのODA供与—開発協力適正会議を通じた2015年大綱運用の検証」『国際開発研究』第33巻、第1号、国際開発学会：55-74頁。</p> <p>「日本の開発協力の20年—脱「標語」の教育を」『開発教育』No. 70、開発教育協議会、2023年、4-11頁</p> <p>「中止された環境事業の15年—タイ・サムットプラカン汚水処理事業がもたらしたものの」『環境と公害』49/3、岩波書店、2020年、61-67頁。</p>
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	上記研究分野以外に、貧困、紛争、資源、森林に関する研究であれば、大学院での指導が可能。研究方法としては、院生の研究目的に沿って、インタビューや文献を研究資料とする質的調査の指導を行う。統計データやアンケートに基づく量的調査については、主指導教員は難しいが助言であれば可能。
こんな授業を行なっています	国際協力の概念やアクター（国際機構、NGO）の役割、開発援助の社会・文化的側面、新興ドナー（中国、韓国、タイなど）、開発や開発援助が少数民族に及ぼす影響について学ぶ。毎回文献を指定し、受講生が分担して講読・発表し、教員が補足的な講義を行う。なお、履修する院生の関心をふまえて、授業内容や使用する文献を柔軟に変更する方針である。（2025年度は休講）
学会や社会でこんな活動をしています	NHK 報道記者（1987-92）、日本国際ボランティアセンター（JVC）ラオス事務所代表等（1992-96、ラオス労働勲章）、特定非営利活動法人メコン・ウォッチ代表理事等（1999-）、国際環境 NGO FoE Japan 顧問（2009-）、外務省開発協力適正会議委員（2011-17、20-）、JICA 環境社会配慮助言委員会委員（2011-18、20-）、ジェットロ環境社会配慮諮問委員、外務大臣や環境大臣設置の会議体の委員など。タイ・チュラロンコーン大学アジア研究所客員研究員（2018年度）。国際開発学会常任理事副会長（兼大会組織委員長）、環境アセスメント学会評議員（兼学会誌編集委員）。
私が思う多文化的かつ、インターカルチュラルな人物	文化とは体系的な生きるための工夫（a system of designs for living）であり、集団の全員または特定のメンバーにより共有されるものである。その集団はあらゆる次元に存在している。営利活動や非営利活動かに関わらず、異なる文化を持つ集団間に立って、互いを尊重しながら、共通の目的を達成しようとしている人物。

氏名	森村 修 (教授、准教授、専任講師)
こんな研究をしています	<ul style="list-style-type: none"> ・現代哲学（現象学・現代フランス哲学）：おもにフッサール現象学ならびにフーコー、ドゥルーズ、デリダを中心とした現代フランス哲学。 ・現代倫理学：「ケアの倫理」を中心とした応用倫理学 ・近代日本哲学：いわゆる「京都学派」を中心とした日本哲学 ・美学・芸術哲学：現代アートを中心としたアート／デザインの哲学・美学
こんな成果を挙げています	<ol style="list-style-type: none"> (1) 森村修『ケアの倫理』（大修館書店、2000年） (2) 森村修『ケアの形而上学』（大修館書店、2020年） (3) 森村修「「社会政治的トラウマの」の倫理」（牧野英二他編『哲学の変換と知の越境』所収、法政大学出版局、2019年） (4) 森村修「アマルティア・セン—自由と正義のアイデア」（榎木玲子/法政大学国際文化学部編『〈境界〉を生きる思想家たち』所収、法政大学出版局、2016年） (5) 森村修「西田幾多郎の「グラマトロジー」—〈書〉の美学=感性学〔エステティクス〕の可能性」（東北大学哲学研究室編『思索』所収、2021年）
ほかに、こんなジャンルに関心をもっています	<ul style="list-style-type: none"> ・ 現代哲学（現象学・ポスト構造主義など）／現代倫理学（応用倫理学も含む） ・ 日本哲学 ・ 芸術哲学・美学（アートの哲学思想など） ・ 社会哲学・政治哲学・経済哲学 ・ 医療／看護／ケアの倫理学 ・ 最近では、技術哲学（Philosophy of Technology）や、AIの倫理学／政治哲学にも関心がある
こんな授業を行なっています	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2024年度は、サバティカル（国内研究）のため、学部・大学院の授業は休講。 ・ 2025年度は、大学院必修科目「国際文化研究 A」を担当。また、大学院科目「多文化情報空間論 I A」（春学期）では、日本の現代思想家・哲学者の柄谷行人『日本近代文学の起源』（1980）と浅田彰『構造と力』（1982）を輪読。同科目「I B」で、ジュディス・バトラの『ジェンダー・トラブル』（1990）を取り上げた。 ・ 2026年度も、「国際文化研究 A」を担当する。「多文化情報空間論」では、現象学の祖フッサールの『イデーニ II』を精読し、現象学的哲学を学ぶ予定。
学会や社会でこんな活動をしています	<ul style="list-style-type: none"> ・ 2023年度で、50周年を迎える「比較思想学会」の理事として活動し、日本の宗教・哲学思想と西洋哲学・思想との比較哲学研究者の育成に関わっている。 ・ 様々な障がいを抱える人たちとその家族の方々の活動を、アート／デザイン活動に関係づけることを中心に活動している「アートミーツケア学会」に属し、障がいを持つ人たちが過ごしやすい社会を構築するために、哲学・美学・思想的な観点から活動をしている。
私が思う多文化的かつ、インターカルチュラルな人物	特に思いつきません。